

2020年度実施方針

環境部

1. 件名 (大項目) 省エネ化・低温室効果を達成できる次世代冷媒・冷凍空調技術及び評価手法の開発

2. 根拠法

国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構法第15条第1号二、第3号及び第9号

3. 背景及び目的・目標

<背景>

現在、冷凍空調機器の冷媒をはじめ様々な用途で使用されている代替フロン（HFC）は、温室効果が大きく、パリ協定において排出削減対象ガスに指定され、排出削減のための対策が求められている。また、HFCは、従来はオゾン層保護を目的とするモントリオール議定書の対象外であったが、2016年10月の改正において、新たにHFCの生産及び消費量の段階的削減義務が追加された。本改正で先進国は、HFC生産・消費量を2011-2013年の実績平均から算出される基準値をもとに、2019年以降段階的にその限度値を削減し、最終的には2036年には85%までに削減する義務が課せられている。既存冷媒物質の継続使用ではこの目標を達成できないことが予想されており、冷凍空調分野においては、これまでより一層温室効果の低い冷媒及びそれを適用した冷凍空調機器の早期開発が必須の状況となっている。

こうした世界的なHFC削減意識の高まりの一方で、地球温暖化への影響が極めて少ない冷媒（以下「次世代冷媒」という。）の多くは、いずれも従来のHFC冷媒適用冷凍空調機器と同等の機器性能を維持、あるいはそれ以上の性能とするための技術的ハードルが高く、さらに安全性においても課題（可燃性、化学的不安定性等）があるため、世界的に次世代冷媒適用冷凍空調機器は実用化に至っていない。これは、次世代冷媒の基本特性評価及び次世代冷媒使用時の安全性評価・リスク評価の標準的な評価手法が確立していないことが大きな原因の一つである。

さらに、2019年1月のキガリ改正発効に合わせ国内での新たなHFCの生産量・消費量の削減義務を履行するため、HFCの製造及び輸入を規制する等の措置を講じた「オゾン層保護法」が改正、公布されている。本法では、HFCの生産量・消費量の限度を定めて段階的削減を推進していくとしている。また、HFC削減に寄与する画期的な低GWP冷媒の製造等に対するインセンティブの付与や次世代冷媒を活用した機器の開発・導入の促進が謳われている。

<目的>

冷凍空調機器は一旦市場に投入されれば、その後十数年以上にわたり排出源として温暖化に悪影響を及ぼすため、一刻も早く低温室効果冷媒を適用した冷凍空調機器を開発し市場に投入させることが不可欠である。冷凍機器のうち、家庭用冷凍冷蔵庫においては既に強燃性冷媒の安全性評価が十分に行われ、低GWP冷媒への転換が進んでいるが、業務用小型冷凍冷蔵庫等に対しては、次世代冷媒候補の使用に必要な安全対策の技術開発や安全性・リスク評価手法が確立していないことから、依然としてHFC冷媒が使用されている。また、空調機器の中でも、家庭用空調機器は市中冷媒ストック量がきわめて多く、大気中への漏えい源としても影響が大きい。こうした状況をふまえ、本事業では、次世代冷媒を使用した省エネ冷凍空調機器の開発基盤を整備し、2026年を目途とする冷媒及び冷凍空調機器製品の市場投入に貢献することをねらいとして、業務用冷凍冷蔵庫及び家庭用空調機器を主とする中小型規模の冷凍空調機器に使用する次世代冷媒の安全性・リスク評価手法を確立する研究開発を実施する。

さらに、新たな技術が普及する期間を考慮すると、キガリ改正の目標達成のためには、次世代冷媒の適用が一部ではなされているものの普及に至っていない領域に対し、新しいシーズ技術を踏まえた幅広い対策を実施し、多方面から可能な限り迅速な普及を後押しする技術開発を行うことが重要である。普及を妨げる技術課題に対して技術開発を進め、効率の向上・適用範囲の拡大を通して普及を促進していくことが必要不可欠であることから、次世代冷媒適用技術の開発を実施する。

【中間目標】（2020年度）

[委託事業]

研究開発項目①「次世代冷媒の基本特性に関するデータ取得及び評価」

- 1) 冷凍空調機器性能と省エネ性を両立しうる次世代冷媒候補について、基本物性データ（熱物性、伝熱特性等）の取得及び評価（漏洩時挙動評価、フィジカルハザード評価等）を実施する。
- 2) 取得した基本物性データ及び評価結果に関して、国際規格化・国際標準化や国際データベース等への登録に必要なデータについて整理し、取得を進める。

研究開発項目②「次世代冷媒の安全性・リスク評価手法の開発」

- 1) 冷凍空調機器性能と省エネ性を両立しうる次世代冷媒候補について安全性・リスク評価（漏洩時挙動評価、フィジカルハザード評価等）を実施し、安全性・リスク評価手法確立に向けた目途付けを行う。

なお、研究開発項目①及び②の成果を踏まえ、産官学の外部有識者と連携の上、本事業で得られた低温室効果次世代冷媒の評価手法に関する成果を、業界の実用的な安全基準や、国際規格・国際標準等への提案に効果的に結び付けるためのロードマップを策定する。

また、次世代冷媒の基本物性データ及び安全性・リスク評価手法等について、国際規格・国際標準へ

の提案や国際データベース等への登録申請を1件以上行う目途を得る。

- ※ 次世代冷媒の社会実装に関する国際規格、国際標準としては ISO5149 (機器)、ISO817 (冷媒物性)、IEC60335-2-40 (空調)、IEC60335-2-89 (冷凍冷蔵)、ASHRAE34 (冷媒物性)、ASHRAE15 (機器) が想定される。また、国際データベースでは、NIST (アメリカ国立標準技術研究所) が作成する冷媒熱物性データベースソフトウェア ; REFPROP が想定される。

[助成事業 (助成率 : 1 / 2 以内)]

研究開発項目③「次世代冷媒及び次世代冷媒適用技術の開発」

- 1) 次世代冷媒適用技術の開発において、現状市販フロン品と同等以上の性能(COP、APF 等*)を実現する技術について、個別テーマごとに目標を定め、これを達成する見通しを得る。

- ※ COP:成績係数 (Coefficient Of Performance) の略。冷暖房器具のエネルギー消費効率を示す係数で、消費電力 1kW に対しての機器の冷却能力、暖房(加熱)能力を表したもの。

- APF: 通年エネルギー消費効率 (Annual Performance Factor) の略。1年を通して、ある一定条件のもとにエアコンを使用した時の消費電力 1kW あたりの冷房・暖房能力を表したもの。

【最終目標】 (2022年度)

[委託事業]

研究開発項目①「次世代冷媒の基本特性に関するデータ取得及び評価」

- 1) 中間評価結果を踏まえ、冷凍空調機器性能と省エネ性を両立しうる次世代冷媒候補について、基本物性データの取得及び評価を実施する。

研究開発項目②「次世代冷媒の安全性・リスク評価手法の開発」

- 1) 中間評価結果を踏まえ、冷凍空調機器性能と省エネ性を両立しうる次世代冷媒候補について、安全性・リスク評価手法を確立する。
- 2) 次世代冷媒使用にあたっての実用的な安全基準 (業界規格等) について、業界団体等を通して、策定の見通しを得る。

なお、研究開発項目①及び②の成果を踏まえ、次世代冷媒の基本物性データ及び安全性・リスク評価手法等について、業界団体等を通して、国際規格・国際標準への提案や国際データベース等への登録申請を1件以上行う。

[助成事業 (助成率 : 1 / 2 以内)]

研究開発項目③「次世代冷媒及び次世代冷媒適用技術の開発」

- 1) 中間評価結果を踏まえ、次世代冷媒適用技術の開発において、現状市販フロン品と同等以上の性能(COP、APF等)を実現する技術について、個別テーマごとに目標を定め、これを達成する。

4. 実施内容及び進捗(達成)状況

プロジェクトマネージャーにNEDO環境部主任研究員 阿部正道を任命して、プロジェクトの進行全体を企画・管理や、そのプロジェクトに求められる技術的成果及び政策的効果を最大化させた。

また、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構研究開発部特任教授 飛原英治氏をプロジェクトリーダー、早稲田大学総合領域研究機構熱エネルギー変換工学・数学融合研究所 所長 齋藤潔氏をサブプロジェクトリーダーとし、以下の研究開発を実施した。

4. 1 2019年度(委託)事業内容

研究開発項目①「次世代冷媒の基本特性に関するデータ取得及び評価」においては、冷凍空調機器性能と省エネ性を両立しうる次世代冷媒候補について、基本物性データ(熱物性、伝熱特性等)の取得及び評価(漏洩時挙動評価、フィジカルハザード評価等)を実施して、国内外に成果を公表及び発信すべく整備を行った。

- (a)「中小型規模の冷凍空調機器に使用する次世代冷媒の熱物性、伝熱特性および基本サイクル性能特性の評価研究」(2018年度～2020年度)

(実施体制【委託事業】:(国)九州大学ー再委託(公)富山県立大学、(学)日本大学、(国)長崎大学、(国)産業技術総合研究所、(学)九州産業大学、(国)佐賀大学、(国)東京海洋大学)

次世代冷媒に関する熱力学的性質及び輸送的性質の高精度データを取得し、信頼できる熱物性計算ツールを開発して、伝熱特性及び冷凍サイクル基本特性を明らかにすることを目的として、下記の研究項目を実施した。

- ・HF0系冷媒を含む混合冷媒及び高沸点HF0系冷媒の熱物性を測定し、評価した。
- ・HF0系冷媒を含む混合冷媒及び高沸点HF0系冷媒における各種熱交換器の伝熱特性を測定し、評価した。
- ・HF0系冷媒を含む混合冷媒におけるヒートポンプサイクルの熱力学的解析と実験的評価を実施した。

- (b)「低GWP低燃焼性混合冷媒の安全性評価」(2018年度～2020年度)

(実施体制【委託事業】:(国)産業技術総合研究所)

次世代冷凍空調機器用の冷媒に求められる、低コスト、高効率、低GWP、及び高安全性といった要素のうち、低GWPかつ安全性に優れた冷媒の開発を支援するため、特に冷媒の混合が燃焼特性等安全性に与える影響を明らかにすることを目的に、下記の研究項目を実施した。

- ・低 GWP 混合冷媒の安全性評価として、燃焼限界・燃焼速度・消炎距離等を従来式と比較検討した。
- ・低 GWP 混合冷媒の実用上の安全性評価として、燃焼特性を温度・湿度依存性について評価した。

(c) 「低 GWP 冷媒を採用した次世代冷凍空調技術の実用化評価に関する研究開発」(2018 年度～2020 年度)

(実施体制【委託事業】：(学) 早稲田大学ー再委託 (国) 電気通信大学)

低 GWP 冷媒を導入した中小型規模の冷凍空調機器の性能を実用機レベルにおいてまで評価できる手法を確立し、工業界や学术界でも広く標準ツールとして活用が可能な共通解析プラットフォームとしてのシミュレーションツールとして展開することを目的に、下記の研究項目を実施した。

- ・AI を用いた冷媒の沸騰熱伝達率予測について検討した
- ・より高度な性能評価試験装置の製作を目指し、大型化・実運転性能・非定常状態等を考慮した仕様検討を行った。
- ・検討した熱交換器シミュレーターにおいて各種冷媒性能について比較評価を行った。

研究開発項目②「次世代冷媒の安全性・リスク評価手法の開発」(2018 年度～2020 年度)においては、次世代冷媒を空調機器や冷凍冷蔵機器に適用するときの燃焼に伴う安全性やリスク評価を行う手法の確立を目指して、冷媒漏洩時の拡散、燃焼時の危害度評価、現実的な使用環境下で想定される着火源による火災危険性評価、実規模実験によるフィジカルハザード評価を行った。また、HFO 冷媒の自己分解反応の機構解明、抑制効果評価を行うことに対して、下記の研究項目を実施した。

・(実施体制【委託事業】：(国) 東京大学ー再委託 (国) 静岡大学)

- ・可燃性冷媒漏洩時のリスク研究において、ルームエアコン・ショーケースの漏洩数値解析を実施し、IEC 規格の妥当性を評価した。
- ・可燃性冷媒が室内で着火した時の危害度において、反応モデルを構築し、数値解析を実施した。
- ・エアコンポンプダウン時のディーゼル爆発において、発生抑制が混合冷媒濃度に依存する実験成果を得た。
- ・HFO 冷媒の自己分解反応の安全性評価のうち、反応抑制効果の実験により、抑制剤の効果を確認した。また、圧縮機運転時におけるレイヤーショート現象としてショート発生場所の影響を検討する実験を行った。

・(実施体制【委託事業】：(公) 公立諏訪東京理科大学)

- ・機器使用時に問題となる着火源のスクリーニングと着火モデルの構築を実施した。
- ・着火源モデルを用いた着火可能性評価手法の確立のうち、電気機器及び高温表面による着火

実験装置を製作し、着火実験及び評価を行った。

・(実施体制【委託事業】：(国) 産業技術総合研究所)

- ・冷凍空調機器からの冷媒漏洩事故事例を検討し漏洩条件のモデル化を実施した。
- ・可燃濃度域内に存在する実在の機器類の点火能評価として、実験装置を製作した。
- ・エアコン室内機内での急速漏洩時の拡散挙動計測として、測定条件を整理し、実験に着手した。

4. 2 2019年度(助成)事業内容

研究開発項目③「次世代冷媒及び次世代冷媒適用技術の開発」においては、公募によって体制を決定し、次世代冷媒を使用した冷凍空調機器の効率向上や適用範囲拡大化等のための技術開発、及び新たな冷媒の開発のための整備を行い、研究に着手した。

(a) 「自然冷媒および超低 GWP 冷媒を適用した大形クーリングユニットの研究」(2019 年度～2020 年度)

(実施体制【助成事業】：三菱電機(株))

自然冷媒および超低 GWP 冷媒を使用した高効率かつ経済的な大形のクーリングユニットを開発するため、以下を実施した。

- ・使用する冷媒候補の中から、冷媒性能や想定される機器サイズ、コスト等の比較検討を行い、最適な冷媒の第一次選定を実施した。
- ・圧縮機の冷媒回路、小型化及び熱交換器の最適分配仕様等を机上検討し、決定した。
- ・机上検討結果を踏まえ、機器の一部について、基礎試験機を用いた検証を行った。

(b) 「コンデンシングユニットの次世代低GWP冷媒対応化技術の開発」(2019 年度～2020 年度)

(実施体制【助成事業】：(東芝キャリア(株))

低GWP混合冷媒を使用した、高効率で経済性の優れたコンデンシングユニットを開発するため、以下を実施した。

- ・最近開発された候補冷媒について、冷凍サイクルシミュレーションを実施した。
- ・候補冷媒について、低温域における正確な物性値の測定を実施した。
- ・候補冷媒のドロップイン試験を実施し、性能ポテンシャルを把握した上で、冷媒種の絞り込みを行った。

(c) 「低温機器における CO2 冷媒を使用した省エネ冷凍機システム開発及びその実店舗評価」(2019 年度～2020 年度)

(実施体制【助成事業】：(パナソニック(株))

現在 CO2 冷媒を使用した冷凍機は、CO2 の特性やコスト上の課題によって適用可能な機種や温度の範囲が限定されていることから、機器の適用分野拡大を図るため、以下の技術開発を実施した。

- ① CO2 冷媒を使用した機器の適用可能な分野拡大と低コスト化を図るため、大出力冷凍機を開発した。
- ② 近年の高外気温度においても高効率な CO2 冷凍機システムを開発するため、熱交換器ユニットを開発した。
- ③ CO2 冷媒を使用したシステム全体での省エネ化を実現するため、CO2 冷凍機の高温排熱を利用したシステムを開発した。

(d) 「GWP 10 以下の直膨型空調機用 微燃性冷媒の開発」(2019 年度～2020 年度)

(実施体制【助成事業】：(ダイキン工業(株)－委託(国)産業技術総合研究所)

GWP10 以下の新冷媒及びこれを適用した空調機器を開発するため、以下を実施した。

- ・新冷媒の成分物質の毒性試験において、急性毒性 LC50 で 20,000ppm 以上であることを確認した。
- ・新冷媒の成分物質単体及び別の物質との混合における燃焼性に係るデータを取得し、評価を行った。
- ・新冷媒の成分物質の熱分解開始温度、分解率、生成物の評価を行った。
- ・新冷媒の成分物質の安定性を評価し、課題を明確化して、新冷媒の混合組成候補を数種類選定した。
- ・新冷媒候補のサイクルシミュレーション評価及びドロップイン試験による性能 (COP, APF) の初期評価を行った。

4. 3 これまでの事業実施状況

(1) 実績額推移

	2018 年度		2019 年度	
	委託		委託	助成
実績額推移 需給勘定 (百万円)	240		509	84
特許出願件数 (件)	0		0	—
論文発表数 (報)	0		16	—
フォーラム等 (件)	0		0	—

5. 事業内容

プロジェクトマネージャーに NEDO 環境部主任研究員 阿部正道を任命してプロジェクトの進行全体を企画・管理し、そのプロジェクトに求められる技術的成果及び政策的効果を最大化させる。

また、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構研究開発部特任教授 飛原英治氏をプロジェクトリーダー、早稲田大学総合研究機構熱エネルギー変換工学・数学融合研究所 所長 齋藤潔氏をサブプロジェクトリーダーとし、以下の研究開発を実施する。実施体制については、別紙を参照のこと。

5. 1 2020年度（委託）事業内容

研究開発項目①「次世代冷媒の基本特性に関するデータ取得及び評価」においては、冷凍空調機器性能と省エネ性を両立しうる次世代冷媒候補について、基本物性データ（熱物性、伝熱特性等）の取得及び評価（漏洩時挙動評価、フィジカルハザード評価等）を実施して、国内外に成果を公表及び発信すべく整備を行う。

(a) 「中小型規模の冷凍空調機器に使用する次世代冷媒の熱物性、伝熱特性および基本サイクル性能特性の評価研究」（2018年度～2020年度）

（実施体制【委託事業】：（国）九州大学－再委託（公）富山県立大学、（学）日本大学、（国）長崎大学、（国）産業技術総合研究所、（学）九州産業大学、（国）佐賀大学、（国）東京海洋大学）

次世代冷媒に関する熱力学的性質及び輸送的性質の高精度データを取得し、信頼できる熱物性計算ツールを開発して、伝熱特性及び冷凍サイクル基本特性を明らかにすることを目的として、下記の研究項目を実施する。

- ・HF0系冷媒を含む他候補の混合冷媒系の熱物性を測定する。また、定圧比熱の測定を行う。
- ・HF0系冷媒を含む他候補の混合冷媒系の伝熱特性を測定する。また、伝熱データベースの作成に着手する。
- ・HF0系冷媒を含む他候補の混合冷媒系について実験的解析を実施する。

(b) 「低GWP低燃焼性混合冷媒の安全性評価」（2018年度～2020年度）

（実施体制【委託事業】：（国）産業技術総合研究所）

次世代冷凍空調機器用の冷媒に求められる、低コスト、高効率、低GWP、及び高安全性といった要素のうち、低GWPかつ安全性に優れた冷媒の開発を支援するため、特に冷媒の混合が燃焼特性等安全性に与える影響を明らかにすることを目的に、下記の研究項目を実施する。

- ・低GWP混合冷媒の安全性評価として、安全特性の混合比依存性評価と、不活性化条件を明確にするため、比較検討として他の混合冷媒について実験・評価を継続実施する。
- ・低GWP混合冷媒の実用上の安全性評価として、混合系の温度・湿度依存性を評価するため、濃度分布を考慮した検討を行う。

(c) 「低 GWP 冷媒を採用した次世代冷凍空調技術の実用化評価に関する研究開発」(2018 年度～2020 年度)

(実施体制【委託事業】：(学) 早稲田大学—再委託 (国) 電気通信大学)

低 GWP 冷媒を導入した中小型規模の冷凍空調機器の性能を実用機レベルにおいてまで評価できる手法を確立し、工業界や学术界でも広く標準ツールとして活用が可能な共通解析プラットフォームとしてのシミュレーションツールとして展開することを目的に、下記の研究項目を実施する。

- ・各要素のモデリング及び性能解析を継続して行い、混合冷媒の現象究明実験を行ってモデルの妥当性を検証する。
- ・性能評価装置を開発製作し、評価手法の妥当性を検討する。
- ・シミュレーターのグラフィックユーザーインターフェース及び計算エンジンを統合的に検証する。

研究開発項目②「次世代冷媒の安全性・リスク評価手法の開発」(2018 年度～2020 年度)においては、次世代冷媒を空調機器や冷凍冷蔵機器に適用するときの燃焼に伴う安全性やリスク評価を行う手法の確立を目指して、冷媒漏洩時の拡散、燃焼時の危害度評価、現実的な使用環境下で想定される着火源による火災危険性評価、実規模実験によるフィジカルハザード評価を行う。また、HFO 冷媒の自己分解反応の機構解明、抑制効果評価を行うことに対して、下記の研究項目を実施する。

(実施体制【委託事業】：(国) 東京大学—再委託 (国) 静岡大学、(国) 広島大学)

- ・可燃性冷媒漏洩時のリスクの研究では、ルームエアコンやショーケースの漏洩実験を基に、シミュレーションの高度化を行う。
- ・可燃性冷媒が室内で着火した時の危害度を研究では、小規模燃焼装置を使った燃焼シミュレーションや燃焼試験を継続して行うと共に、空間スケールを拡大した燃焼シミュレーションを実施する。
- ・エアコンポンプダウン時のディーゼル爆発の発生抑制において、異なるタイプの抑制剤での実験を行う。
- ・また、HFO 冷媒の自己分解反応の安全性評価では、不均化反応の抑制メカニズムの解析を進めるとともに他の抑制剤の効果を検討する。また、圧縮機内部のレイヤーショートに通電エネルギーを測定し、放電現象について検討を行う。
- ・HFO 系冷媒の自己分解反応について、計算化学的な手法を用いて反応機構を検証すると共に、自己分解反応を抑制する機構について検討を行う。

(実施体制【委託事業】：(公) 公立諏訪東京理科大学)

- ・各種着火源による次世代冷媒のフィジカルリスク評価では、着火モデルに基づいた着火性能評価実験を継続実施し、高温表面による着火性評価を行う。

- ・(実施体制【委託事業】：(国) 産業技術総合研究所)
- ・冷凍空調機器からの漏洩条件のモデル化を継続実施する。
- ・少量長時間漏洩時の拡散挙動計測実験と解析作業を行う。
- ・実規模の燃焼影響試験に着手する。

5. 2 2020年度(助成)事業内容

研究開発項目③「次世代冷媒及び次世代冷媒適用技術の開発」においては、次世代冷媒を使用した冷凍空調機器の効率向上や適用範囲拡大化等のための技術開発、及び新たな冷媒の開発を行う。

(a) 「自然冷媒および超低 GWP 冷媒を適用した大形クーリングユニットの研究」(2019 年度～2020 年度)

(実施体制【助成事業】：三菱電機(株))

自然冷媒および超低 GWP 冷媒を使用した高効率かつ経済的な大形のクーリングユニットを開発するため、以下を実施する。

- ・選定した自然冷媒および超低 GWP 冷媒を使用して現行機器と同等の性能とするため、圧縮機の吸入圧力損失低減、圧縮機の大容量駆動化等の検討を行う。また、熱交換器の最適仕様を決定する。
- ・デフロスト性能及びサイクル安定性制御の検討を行い、決定した圧縮機及び熱交換器を搭載したユニットが冷凍サイクル全体で安定的に運転可能で、年間 COP が現行の R404 冷媒使用機器と同等以上となる制御ロジックを構築し、実証試験機における評価試験を行う。

(b) 「コンデンシングユニットの次世代低 GWP 冷媒対応化技術の開発」(2019 年度～2020 年度)

(実施体制【助成事業】：(東芝キャリア(株))

低 GWP 混合冷媒を使用した、高効率で経済性の優れたコンデンシングユニットを開発するため、以下を実施する。

- ・絞り込んだ冷媒種に最適な機器設計を行うため、温度グライドによる凝縮器側過冷却度や蒸発器側過熱度の過不足及び吐出温度の高温化による冷媒循環量不足等を考慮した熱交換器及び圧縮機の試作を行い、これを搭載した試験機において現行機器の定格 COP と同等を達成する。

(c) 「低温機器における CO₂ 冷媒を使用した省エネ冷凍機システム開発及びその実店舗評価」(2019 年度～2020 年度)

(実施体制【助成事業】：(パナソニック(株))

現在 CO₂ 冷媒を使用した冷凍機は、CO₂ の特性やコスト上の課題によって適用可能な機種や温度の範囲が限定されていることから、機器の適用分野拡大を図るため、以下の技術開発を実施する。

- ① CO₂ 冷媒を使用した機器の適用可能な分野拡大と低コスト化を図るため、2019 年度に開発した

大出力冷凍機の実店舗を使用した評価を実施する。

- ② 近年の高外気温度においても高効率な CO2 冷凍機システムを開発するため、2019 年度に開発した熱交換器ユニットの実店舗を使用した評価を実施する。
- ③ CO2 冷媒を使用したシステム全体での省エネ化を実現するため、2019 年度に開発した CO2 冷凍機の高温排熱を利用したシステムの実店舗を使用した評価を実施する。
- ④ 現在 CO2 冷凍機が使用されていない中高温領域への適用拡大のため、中高温冷凍機に適した方式を開発する。

(d) 「GWP 10 以下の直膨型空調機用 微燃性冷媒の開発」(2019 年度～2020 年度)

(実施体制【助成事業】：(ダイキン工業(株)－委託(国)産業技術総合研究所)

GWP10 以下の新冷媒及びこれを適用した空調機器を開発するため、以下を実施する。

- ・新冷媒の成分物質の主要な毒性試験を完了して、低毒性の見通しを示す。
- ・安定性課題に対して、新冷媒候補の混合成分や添加剤等の検討を行い、抑制条件を見出す。
- ・新冷媒候補の安全性に係るデータをもとに、機器使用時のリスクと検討すべき課題を抽出する。
- ・機器使用時のリスク、冷媒性能の試算等から GWP10 以下の新冷媒の組成を決定する。
- ・圧縮機を使用した一次耐久性試験によって、新冷媒を使用した機器の開発における課題を抽出する。

5. 3 フロン対策分野に係る技術動向の把握

2020 年度は、フロン対策分野における、冷凍空調機器開発動向、冷媒漏洩状況とその対策（機器の使用時及び廃棄時）、国内外の可燃性冷媒等の法規制、規格、次世代冷媒適用機器の普及促進方策等についての関係調査等による情報収集を実施し、その結果を本事業の運営に活用する。なお、調査の効率化の観点から、必要に応じて本プロジェクトにおける委託事業として実施する。

5. 4 2020 年度予算規模

	委託事業	助成事業
エネルギー対策特別会計(需給)	380 百万円 (継続)	320 百万円 (継続)

事業規模については、変動があり得る。

6. その他重要事項

(1) 評価の方法

NEDO は、技術的及び政策的観点から、研究開発の意義、目標達成度、成果の技術的意義並びに将来の産業への波及効果について、外部有識者による研究開発の中間評価を 2020 年度に実施する。

また事業完了後、研究開発成果について事後評価を2023年度に実施する。

(2) 運営・管理

四半期に一回程度プロジェクトリーダー等を通じてプロジェクトの進捗について報告を受けるとともに、外部有識者で構成する技術検討委員会を開催し、技術的評価を受け、選択と集中により優秀な技術を短期間に育成するマネジメントを行う（例えば、成果が得られた時点で、実用化研究など次ステップへの転出を奨励する。反面、期間内に成果が見込めないと判断された事業は開発途中であっても中止するなど。）

加えて、研究期間中にも新規技術に関する動向調査を実施し、有望と認められる内容については、新規開発に着手するフレキシビリティを保持した研究開発マネジメントに心掛ける。

(3) 複数年度契約の実施

実施計画により適当と判断される場合は複数年度契約を行う。

(4) 知財マネジメントにかかる運用

「NEDO プロジェクトマネジメントにおける知財マネジメント基本方針」に従ってプロジェクトを実施する（研究開発項目①、②のみ）。

7. スケジュール

7. 1 本年度のスケジュール：

2020年8～9月・・・上半期進捗検討・PL 指導

2021年 2月・・・2020年度技術検討委員会

8. 実施方針の改訂履歴

(1) 2020年1月、制定。

(2) 2020年6月、改訂。

以上

【別紙】事業実施体制の全体図

2020年度「省エネ化・低温室効果を達成できる次世代冷媒・冷凍空調技術及び評価手法の開発」

